築上町歴史散歩

Chikujo Town History walk *Vol.3*

築上町教育委員会文化財保護係TEL 0930-52-3771
〒829-0106 福岡県築上郡築上町大字船迫1342-22

ウェブサイト 築上町歴史散歩 検索

	名　称	場　所	説　明
12	海軍中佐　進信蔵氏　石碑	上日奈古	明治32年（1899）上日奈古で生まれ、日本海軍のテストパイロットとして航空機の発展や後進の育成に大きく貢献した。航空母艦上の短い滑走路から飛行機を離陸させる射出機（カタパルト）飛行の先駆けといわれる。昭和8年（1933）部下を指導中に事故死した。
13	築城海軍通信施設（送信所）跡	行橋市羽根木	標高5m前後の微高地にあり、周囲を土塁で囲まれ、内部には巨大な鉄筋2基をはじめコンクリート建物があった。2か所あった門柱のうち、1か所が現存する。
14	築城海軍貯水施設跡	行橋市道場寺山山頂付近	4つに仕切られたコンクリート製の貯水槽があり、祓川から汲み上げられた水は、ここを経て築城飛行場へ送られた。現在、貯水槽の縁は見ることができる。
15	安浦神社	行橋市稲童	鳥居や石灯籠に機銃掃射の銃撃痕が残る。特に南側が激しく、アメリカ軍機は築城飛行場側から北に移動しながら機銃掃射したことがわかる。空襲の脅威を今に伝える。
16	築城海軍地下通信司令部壕跡	行橋市稲童	飛行場周辺の空襲が激化した昭和20年3月、築城海軍航空隊の情報通信機能を守るため建設された。幅3×高さ2.5mのコンクリート造で5室と出入口が2か所ある。
17	稲童1号掩体壕	行橋市稲童	掩体壕は飛行機の格納庫のこと。松原から稲童にかけ、昭和19年8月頃から林野が開かれ、飛行機を退避させる誘導路や掩体壕が築かれた。
18	神風特攻隊銀河隊出撃之地	築上町西八田（築城基地内）	説明と写真は2頁「築城飛行場を飛び立った神風特別攻撃隊」参照。
19	寺渡橋	築上町高塚	説明は2頁 ③現在の重箱池④無名勇士之墓と高塚出身戦没者の墓）参照
20	金富神社	築上町湊	説明は1頁「空襲による掩体壕や弾薬倉庫壕の建設」参照。
21	正八幡神社（西八田）	築上町西八田	築城飛行場建設時に現在地に移転（1頁）。神社地内には八津田国民学校にあった昭和8年建造の奉安殿があり、昭和28年に移築された。（奉安殿の説明3頁）
22	奉安殿	安武184番地（字善人）	下城井国民学校にあったものが戦後移設された。平成30年に石積基壇を除去後、奉安殿部分のみ敷地内の南側に移設された。（奉安殿の説明3頁）
23	奉安殿	大楠神社	上城井国民学校から戦後移設された。現上城井小学校校庭に奉安殿があった際の石積みの高台が残存するが、現在「太平洋戦争戦死者慰霊碑」が建つ。（奉安殿の説明3頁）
24	太平洋戦争戦死者慰霊碑	上城井小学校	昭和20年（1945）8月7日のアメリカ軍による空襲により犠牲となった教師及び児童の慰霊碑。平成22年(2010)に有志により建立。（説明は2頁「築城飛行場周辺の大空襲」参照）
25	忠魂碑	築城小学校	昭和11年（1936）2月建立。明治時代以降、国の戦争で戦死した人を祀る。題字は荒木貞夫陸軍大将の筆。
26	防空壕	大野神社	神社本殿北側の鳥居東側、2か所の入口。内部は長さ10m程度。昭和19年以降、本土空襲が本格化し、空襲警報が鳴ると、各人最寄りの防空壕へ避難した。
27	防空壕	葛城小学校南側の丘陵斜面	丘陵斜面に3か所の入口。内部は長さ20m程度。
28	高射砲陣地跡	椎田中学校	現在椎田中学校がある丘陵上は一面の桑畑で、アメリカ軍機が飛来すると、行橋市松原の機銃陣地（昭和20年5月設置）とここの大砲で迎撃した。
29	局地戦闘機「紫電改」墜落地	小原	説明と写真は2～3頁。
30	八田地区通信指揮所跡	西八田（場所不明）	現在の築城基地燃料タンク外柵付近の雑木林にあったという。詳細不明。
31	避難壕跡	下別府（場所不明）	築城基地西側の国道沿いの民家庭にセメント製の屋根が見られた。

このリーフレットは築城飛行場関連再編関連特別事業で制作しました。

築上町の戦争遺産 ― 戦跡・記録・記憶から平和を学ぶ

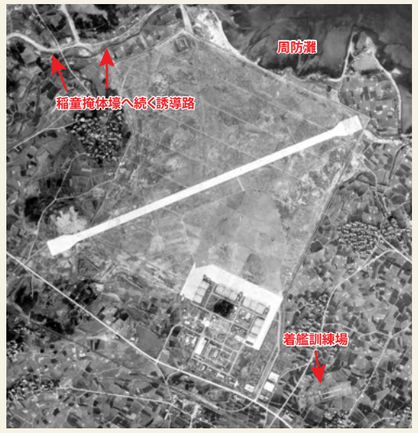
築城海軍航空隊と飛行場の建設

現在の航空自衛隊築城基地は、太平洋戦争時の日本海軍の飛行場で、航空母艦を配備する呉鎮守府に近く、また周防灘沿岸は天候が安定し、中国大陸や沖縄周辺海域が近い好立地のため設置された。海軍の記録では、当初行橋飛行場と記載されたが、海軍関係者が築城駅で下車したことから、築城飛行場が正式名称となった。

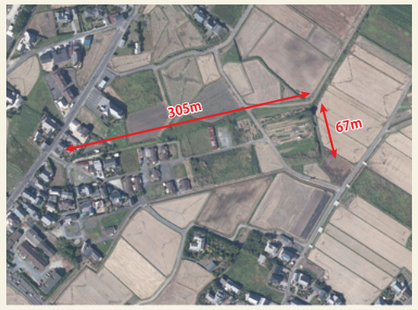
飛行場建設は昭和14年（1939）に着手した。敷地内にあった①正八幡神社（西八田）の神殿建物を現在地まで900mそのまま移動し、3ヶ月以上かかった。太平洋戦争が始まると、朝鮮半島から徴用された労働者等も動員され、24時間体制の突貫工事で、昭和17年（1942）に完成した。

築城海軍航空隊は当初、宮崎県富島町（現日向市）で艦隊所属の練習航空隊として創設され、昭和18年（1943）6月に築城飛行場へ移転した。移転後は飛行場南側の②着艦訓練場を航空母艦に見立てたゼロ戦の離発着訓練など、主に艦載機（航空母艦を離発着する戦闘機）の操縦訓練が行われた。航空母艦の滑走路の長さは陸上の1/6で、その離発着には高度な技術を要した。

昭和19年（1944）3月には筑波海軍航空隊が移転し、第2代築城海軍航空隊が創設され、主に93式陸上中間練習機（通称　赤トンボ）等による陸上機訓練が行われた。昭和20年（1945）には神風特別攻撃隊が編成され、赤トンボに250kg爆弾を抱えて急降下する訓練が始まった。



築城飛行場（昭和22年 アメリカ軍撮影）



②着艦訓練場跡（現在）

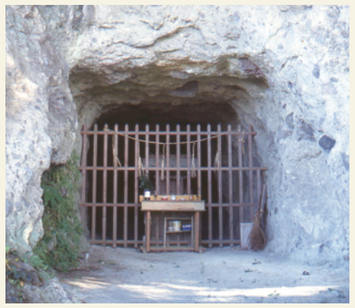
空襲による掩体壕（えんたいごう）や弾薬倉庫壕の建設

アメリカ軍機による日本本土爆撃が八幡製鉄所（北九州市）を目標に開始されると、築城飛行場北側の行橋市稲童には銀河などの大型戦闘機が上空から見えないように格納する⑰掩体壕が築かれた。また築城飛行場には当時、赤トンボ等の小型練習機が100機以上配備され、空襲を避けるため築上町内各所に分散して格納されたといわれる。⑳金富神社は社叢の森に囲まれ上空から見えないため、戦闘機を隠し整備が行われたという。

また、小原では個人宅に十式艦上偵察機（太平洋戦争当時は練習機）のカシ材製プロペラが保存されている。

飛行場の約3km南の広末・赤幡には⑧司令部や⑨兵舎、病舎が移設され、山裾にトンネルを掘り、⑩弾薬倉庫や⑥補給倉庫、⑦通信施設が造られた。

⑦通信施設壕(赤幡)



⑥補給倉庫壕（赤幡）

⑩弾薬倉庫壕（広末）

①正八幡神社（西八田）の移転（地図の①から㉑へ移転）
『八田庄鎮座郷社正八幡神社移転改築写真帳』
＊左上に移転前の神社が写る。

⑥補給倉庫壕には食糧や衣類が収納され、⑦通信施設壕には発電機や電話機が設置された。⑩弾薬倉庫壕（広末）は幅3m×高さ2m、総延長1kmもある長大な壕で、爆薬や機銃弾が格納された。壕の一部は病舎としても使用され、空襲時に避難できない重傷患者が収容されたという証言がある。（『築城基地開設50年史』1993年）

築城飛行場を飛び立った神風特別攻撃隊

昭和20年（1945）2月以降、アメリカ軍の沖縄上陸作戦が実施された。日本は沖縄本島が占領されると、九州・四国一帯が敵の小型戦闘機の飛行圏内に入るため、沖縄を死守する必要があり、戦闘機を敵の航空母艦等へ体当たり攻撃する神風特別攻撃隊菊水部隊を編成した。

昭和20年3月18日午前6時28分から7時にかけて、神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊（銀河11型機）6機が築城飛行場を離陸し、うち5機が九州南東海上のアメリカ軍機動部隊艦船に体当たり攻撃を行い、15名の兵士が亡くなった。

8月9日、空中特攻隊「天雷特別攻撃隊白虎隊」が築城飛行場から出撃した。空中特攻隊は零式艦上戦闘機（通称ゼロ戦）に250㎏爆弾を搭載し、空中でアメリカ軍機B29に体当たりし、直径250～300mの範囲内を飛行するB29編隊の全滅を図る作戦で、海軍内部でも極秘とされ記録もなく、幻の特攻隊ともいわれる。

8月11日、天雷特別攻撃隊飛龍隊が岩国飛行場から築城飛行場へ移されたが、出撃することなく、8月15日の終戦を迎えた。

⑱神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊出撃之地
（航空自衛隊築城基地内　非公開）

㉔太平洋戦争戦死者慰霊碑（上城井小学校）

築城飛行場周辺の大空襲

度重なる空襲被害 上城井小学校を襲った空襲の惨劇

昭和20年（1945）3月18日と7月25日は⑰稲童掩体壕（行橋市）周辺が激しい空襲被害を受けた。この爆撃は飛行場周辺に隠した戦闘機や施設の壊滅を目的としたもので、アメリカ国立公文書館に7月25日の生々しい空爆映像が残されている。

3月18日の空襲時、10歳だった亀田精一氏（築上町西八田）は薄曇りの中、飛行場格納庫周辺が激しい機銃掃射を受けたと証言する。

8月7日、上城井地区周辺など広範囲が攻撃された。当時、㉔上城井小学校で勤務していた冨永チヅコ氏の回想録に小学校の空襲が詳しく書かれている。

「この日は奉安殿の御真影（天皇皇后の写真）の無事を確かめる日で、夏休みだったが、教員と児童が登校していた。午前11時30分頃、空襲警報が鳴り各自避難した。押入れに入ろうとする者、校舎を離れようとする者が入り乱れる中、機銃掃射の音とともに天井から赤土の粉が降り、外では大きな爆発音がして耳鳴りで音がよく聞こえなくなる程だった。運動場に爆弾が落ちたようで、女の子の悲痛な泣き声が耳に響いた。」この空襲で教員と児童4名が死亡し、多くの負傷者が出た。

③現在の重箱池（横井塚池：西八田）

飛行場周辺の空襲被害と負傷者の治療にあたった医師たち

安武の医師、片山愛而氏の日記には、8月7日の空襲の被害状況が記される。
日記を要約すると「空襲は午前10時頃始まり、突然のことで防空壕に入る時間もなかった。空襲は昼過ぎまで断続的に続いた。…西から東に向けて急降下する飛行機3機の機影が見えた。赤幡の辺りだろうか。…（安武の医院で）負傷者の治療にあたっていると、航空隊から救援要請があり、負傷者30人以上を海軍少尉（軍医）と二人で治療に当たり夕方までかかった。」

また椎田の医師、上田哲二氏の手記によると、広末地区に⑨基地衛生隊の病舎があり、避難できない重傷者は横穴壕に収容され、山際の仮設医務室へ順次運ばれた。上田医師ほか地域の開業医に応援要請があり、看護学生だった竹口久枝氏は湊地区集会所で重傷者の看護にあたった。（『築城基地開設50年史』1993年より）

この日の空襲では、築城飛行場近くの③重箱池（横井塚池）周辺に避難していた37人の航空隊操縦学生が機銃掃射により死亡した。また翌8日には広末地区で作業中の兵士が機銃掃射に遭い犠牲となった。空襲は15日の終戦まで毎日続いたという。

8月7日から8日の空襲で亡くなった遺体は、翌日に空襲警報サイレンが鳴る中、⑲寺渡橋下の城井川河川敷で火葬された。兵士の遺骨の一部は航空隊に持ち帰ったが、大半は河川敷に放置されたため、高塚の人々が遺骨を拾い集め、共同墓地に埋葬した。昭和42年、現在地に④無名勇士之墓碑を建立した。

④無名勇士之墓と高塚出身戦没者の墓（高塚）

局地戦闘機「紫電改」の墜落（小原）

昭和20年（1945）8月8日午前10時15分（アメリカ国立公文書館記録）、日本海軍の最新式戦闘機「紫電改」はアメリカ軍小型戦闘機P51（マスタング）4機と激しい空中戦の末、㉙築上町小原に墜落した。

この日の朝10時から昼にかけて八幡製鉄所（北九州市）周辺が空襲の被害に遭い、2,500人以上が死傷した。小原に墜落した紫電改は、アメリカ軍機迎撃のため海軍大村飛行場（長崎県）を離陸した戦闘機24機のうち1機で、小原のほか福岡市、飯塚市など各地で合計10機がアメリカ軍に撃墜され9人が死亡した。

墜落した紫電改のプロペラ（右写真）は4枚羽根の1枚で、小原の地元住民が持ち帰り保存していた。長さ160㎝×最大幅27㎝のジュラルミン製で、弾丸の貫通痕（写真の矢印）があり、アメリカ軍戦闘機P51の12.7㎜機銃で攻撃されたことを物語る。

㉙墜落した紫電改のプロペラ

紫電改 実物大レプリカ（写真提供：兵庫県加西市）

当時を知る小原の地元住民は、「紫電改が墜落した時は、すさまじい爆発音だった」と証言する。搭乗員の横堀嘉衛門（上等飛行兵曹）はパラシュートで降下し、山の木に掛かり死亡して発見された。

アメリカ国立公文書館には、紫電改が機銃掃射され、煙をあげて墜落するガンカメラ映像が残されており、その映像の背景に城井川と上・下罠田池が映る。（2019年、豊の国宇佐市塾が調査発表）

安武の医師、片山愛而氏の日記によると、この日は9日未明まで空襲が続き、真夜中の9日午前1時30分頃にはアメリカ軍大型飛行機の複数機が築上町上空を通過したと記される。

小原地区では、戦争の記憶を後世に継承するため、毎年3月に紫電改の搭乗員を含む戦没者の追悼慰霊祭を行っている。

＊ガンカメラ：戦闘機に装備され、戦果を確認するため機銃掃射に連動して撮影するカメラ。

椎田駅から戦地へ出征する兵士（昭和17年）

空襲に備えた防火訓練（椎田駅前）

戦地への慰問袋を作る椎田高等実業女学校生徒

梵鐘の供出（水原の長寿寺・昭和17年）

⑤奉安殿
戦前、すべての学校にあり、天皇・皇后の写真と教育勅語が納められ、教員と生徒は最敬礼をして拝んだ。戦後大半が撤去解体されたが、築上町では㉑西八田、㉒安武、㉓本庄、⑤椎田小学校の4か所で現存する。中でも椎田小学校の奉安庫は昭和3年（1928）設置の耐火金庫構造の装飾性の高いもので、当時講堂に置かれた。校内に残る貴重なものである。

⑤椎田小学校の奉安庫（非公開）

戦時中の人々のくらし

日本は昭和17年（1942）6月のミッドウェー海戦で敗北以降、戦況が悪化し、アメリカ軍機空襲と本土上陸に備え、防火訓練や竹槍訓練が行われるようになり、兵員不足を補うため、臨時召集令状（赤紙）により多くの民間人が戦地へ送られた。街中では、出征兵士に弾丸除けのお守りとして贈る千人針縫が多く見られた。また兵器製造のため、寺の釣鐘や仏具等あらゆる金属製品が供出された。

㉑旧八津田小学校の奉安殿（正八幡神社）

■年表

昭和14年（1939）	海軍が、築城海軍飛行場建設を八津田村役場に通知し、建設着手。
昭和16年12月8日	太平洋戦争が始まる。
昭和17年6月	ミッドウェー海戦で日本軍大敗。以後、戦況が悪化する。
昭和17年10月	初代築城海軍航空隊が宮崎県富島町（現日向市）に創設。
昭和18年	初代築城海軍航空隊が築城に移転し、ゼロ戦による訓練開始。
昭和19年2月	第五五三航空隊と改称し北海道美幌に移転。
昭和19年3月	筑波海軍航空隊が築城へ移転し、第二代築城海軍航空隊が創設。
昭和19年6月	八幡空襲（北九州市）　＊アメリカ軍機による初の本格的な本土爆撃。
昭和19年7月	サイパン島が陥落し、本土空襲が本格化する。
昭和19年8月以降	稲童（行橋市）に掩体壕、広末に弾薬倉庫壕が造られる。
昭和20年2月	築城飛行場に特別攻撃隊が編成される。
昭和20年3月18日	神風特別攻撃隊菊水部隊銀河隊6機が九州南東海上のアメリカ機動部隊に向け出撃。5機が未帰還。
昭和20年4月1日	アメリカ軍が沖縄本島に上陸し、6月に占領。
昭和20年8月6日	広島に原爆投下。
昭和20年8月7日	築城飛行場周辺が大規模空襲を受け、多数の死傷者が出る。
昭和20年8月8日	八幡大空襲と局地戦闘機「紫電改」が小原墜落。
昭和20年8月9日	長崎に原爆投下。
昭和20年8月15日	終戦。
昭和20年9月（1945）	築城海軍航空隊が廃止となる。

⑪八紘一宇の碑
昭和15年（1940）に赤幡神社社務所建築記念に建立された。八紘一宇には世界を一つの家にするという意味があり、戦中、日本の海外侵略を正当化するスローガンにされた。戦後、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）命令でこうした石碑の大半は撤去された。